



「子どもたちが主人公になる仕掛けを」 言葉の真意

4月当初に「子どもたちが主人公になる仕掛けを」と話しました

しかし、説明の具体性に欠けみなさんを混乱させてしまったと反省しています。

自分自身への反省を含めて今日はこのキーワードを振り返ります。

「仕掛け」が独り歩き…

4月当初、私は皆さんに「子どもが主人公となる仕掛けを」とお話ししました。しかし、今振り返ると説明が抽象的で、「何か新しいことをやらなきゃ」と皆さんに余計なプレッシャーを与えてしまったのではないかと反省しています。「仕掛け」という言葉だけが独り歩きし、**イベントを増やしたり、ただ自由奔放にさせたりすることだと誤解**を招いてしまったかもしれません。

そこで今回は、私自身の反省を含めてその「真意」をお話したいと思います。

「足し算」ではなく「手放し」

「子どもを主人公」にするために、特別な行事や目新しい企画をしなきゃと考えてはいませんか？

実は、その逆なんです。

「子どもが主人公」とは、**活動の「量」を増やすことではなく、今ある活動の中での子どもの「出番」を増やすこと**です。新しいことを始める必要はありません。むしろ、これまで先生方が当たり前に行っていたことを、少しずつ**手放してみる**。そこから始めていこうということです。

「指示」を「選択」に変える魔法

最高の「仕掛け」は、日常の何気ない瞬間にあります。例えば、整列のさせ方、行動の順番、学級のルール…。先生が「**こうしなさい**」「次は〇〇です」と決めていたことを、「**どうすればいいと思う？**」と問いかけてみる。あるいは「AとB、どちらがいい？」と選ばせてみる。先回りして失敗を潰すのではなく、失敗した後に「**どうすればよかったのかな？**」と一緒に考える。

先生が「**教える人**」から、子どもたちの考えを「**引き出す人**」へ。その小さな一歩が、子どもたちを物語の主人公に変えていきます。

「ざわめき」は、学びが動いている証

子どもに任せれば、当然時間はかかりますし、静かにならないこともあるでしょう。思い通りにいかないこともあれば想定外の事態が起きたりすることもあるはずですが、**それでいいんです**。大人が用意した正解をなぞるよりも、子どもたちが自分たちで試行錯誤し、**失敗から学ぶ姿こそが本来の学び**であり、私たちが一番見たい「主人公像」なのではないでしょうか。効率が悪くなることを恐れなくてください。私は、「**静かで整った状態**」よりも、**子どもが動く「ざわめき」を応援したい**と思っています。

先生の「余白」が、子どもの「スペース」になる

先生方が一生懸命になりすぎると、子どもたちはどうしても「受け身」になってしまいます。「教師の私がなんとかしなきゃ」という重荷を、少しだけ下ろしてみてください。先生が作ったその「**余白**」にこそ、子どもたちが**自ら動き出すための「スペース」**になります。何かあったときの責任は、常に私が背負う覚悟でいます。先生方自身が「**教え込むこと**」から**自分を解放し**、子どもたちの成長をゆったりと楽しむ。そんな「**心の余白**」を作ってみることが、**一番の仕掛け**なのかもしれません。